

# コロナを経験して

～ 地域活動の立場から～

広島市西部認知症疾患医療センター  
看護師・若年認知症専門員

岡田 眞理

# 居場所作りのきっかけ

- ・ **認知症地域支援推進員**として**若年性認知症の方**が診断後から公的サービスに繋がるまでの間に不安や悩みを抱えているが、行き場がないことを痛感し**同じ病気の仲間が集う場**が必要と考えた。
- ・ **2017年6月**に特別養護老人ホームの**ボランティアグループ**として発足。
- ・ 現在は**認知症疾患医療センター**の職員として、認知症の方の**診断後支援**および**ピアサポートの場作りの**枠組みで派遣され共同している。

# 活動の概要



項目	目的	結果
開催場所	地域に開かれていること	市営住宅集会所
開催日時	生活のリズム作り ゆっくりできる	週1回 毎週月曜日 10～14時（9～15時）
活動内容	当事者と一緒に考える	施設・町内の手伝い 木工・音楽・スポーツ
支援者	若年性認知症の理解者を増やす 当事者のしたい事を支える	法人職員2名＋センター1名 地域ボランティア(6～8名)
活動の位置づけ	施設ので地域ボランティアグループ	昼食を無料で提供

# 活動の実績



< 2017年6月～2023年6月 >

項目	内容
参加者実人数	(スタートは2人から) 男性18人・女性3人 5～6名/日
年齢	40～67歳
病名	アルツハイマー型認知症 前頭葉側頭葉型認知症
介護度	未申請～要介護5
つながったルート	認知症地域支援推進員 認知症疾患医療センター・専門医クリニック 若年性認知症サポートルーム ケアマネジャー・地域包括支援センターなど

# コロナ禍での本人・家族の様子



- 感染対策で一苦労、コミュニケーションにエネルギーをかける
- 室内での活動を縮小（本人ミーティング、食事の時間など）  
できるだけ屋外の活動をと考えたが、地域との交流はなくなる
- 施設への出入り(昼食の配達)も制限がかかり緊張感を感じた
- 家族、ボランティアからは「インフォーマルサービスだから中止になっても仕方ない」とあきらめと心配の声

## それでも

- 本人からは「ここだけは来たい」「仲間に会いたい」と期待された
- 緊急事態宣言に伴う広島市の地域包括への指導に基づいて中止
- 休み間も電話でつながろう、再開を願って

# 3回目の緊急事態宣言の時



きつね倶楽部を休めば、社会的に孤立してしまう方がいる

「このままでいいのか？」スタッフで悩む

本人と家族に「ここに**来ることで感染の機会になることもあるが**」と

しっかり話し合いして**継続**を提案

→ 本人、家族は「是非お願いしたい！」

- ・ 部屋のカーテンも閉め、こっそり（非公開からのスタート）
- ・ 本人とスタッフだけ、ボランティアもなし

→ ボランティアがたまたま集会所に顔を出す

事情を話すと「自分も**自己責任**で参加したい」と参加

# 本人・家族・支援者の意識の変化



中止の判断基準は緊急事態宣言、行政からの指針  
コロナ陽性、濃厚接触者になったら罪悪感

**緊張感 思考停止**  
**あきらめ**

**情報の整理**  
**思考再開**

気を付けても感染する時はする  
感染しても適切に対応すれば回復  
本人、家族、ボランティアが覚悟をもって再開

# 大切だと感じていること



- 若年性認知症の方が診断を受けて**普通の生活**が遮断される気持ち
- コロナ禍で活動を**中止して改めて**居場所の意義、つながりの必要性を実感

「ここでは認知症の鎧を脱ぐことができる！」

- コロナ禍ではインフォーマルサービスの継続は難しいのが現実でも**インフォーマルだからこそ形を変えて継続**できたすきまを埋める大事なサービスとして意味がある